<翻　訳>

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（9）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
（代表　森　　昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行の Johannes Pauli: Schimpf und Ernst 第359話—第402話である（第358話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，第32巻4号，第33巻2号，4号，第34巻2号，4号に所載）。使用テキストは1924年刊の Johannes Bolte 編（リプリント版1972年）を用い，適宜 H. Österley の版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1992年7月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（藤田保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第359話—第363話	精園	第383話—第387話	大沢
第364話—第368話	橋本	第388話—第390話	森
第369話—第375話	森	第391話—第394話	木野
第376話—第379話	山田	第395話—第398話	精園

第380話—第382話　青木　　第399話—第402話　中条

第三百五十九話　冗談
父親を治した男のこと

ある時一人の裕福な男がいました。この男には息子が一人あり，修学の身でした。父親が再婚しますと，後妻はこの息子を毛嫌いしました。息子はどうしても後妻の意に叶うことができませんでした。後妻は父親に息子を讒訴しました。息子は言いました。「私は別の土地で学問に励みたいと思います。」父親は息子にお金を与えました。息子は勉強して医学の道に励み，ほどなくして医学博士になりました。息子が再び故郷に戻り，家をかまえ，国中で有名になって，大変な名声をかち得ました頃，たまたま父親が病気になりました。息子が父親のところへやってきて，飲み薬を与えますと，父親は数日で元気になりました。その後まもなく継母も，父親と全く同じ病気に罹りました。父親は医者である息子を呼んで，妻を治してもらいたい，妻の病状は自分と全く同じだ，と頼みました。医者は言いました。「お父さん，私にはお母さんを治す自信がありません。だって，お父さんは私が調合したものをすすんでお飲みになりました。お父さんは，私が調合するものすべてが体に良く，病気に効くものと信頼しておいででした。お父さんを健康にしたのは薬よりもむしろこの信頼なのです。でも，お母さんは私を信頼しておいでにならず，私が何か体に害になるものを調合するのではないかとびくびくしておいでです。だから，私はお母さんを治すことはできません。」

ですから，病人が医者にたいして抱いている信頼，これは健康の大きな源なのです。

第三百六十話　冗談
自分が鶏だと思った男のこと

フーゴ[1]がプラト[2]についてある説教のなかで書いていることですが，あ

1　詳細不明。
2　詳細不明。

る男が精神錯乱状態に陥り，自分が雄鶏だと思って，ときをつくっていました。この男をもう一度正気に戻すために，男のためになる何かを飲ませたり，何かをやらせたりすることは誰にもできませんでした。最後に名医がこの男のところへやって来て，自分も雄鶏であると言って，この男がするとおりのもの真似をしました。この病人がときをつくると，医者もときをつくりました。すると，病人はこの医者が差し出す薬を飲み，正気に戻りました。

第三十九章　忠実な召使について

第三百六十一話　冗談
主人を王様にした召使のこと

三人か四人兄弟の息子がいて，どの息子も父親にかわって王様になりたいと思っていました。息子たちはこのことで裁判官のところへやって来ました。その裁判官は判決をくだし，朝早くある村の牧場にある一本の木のところへ皆が馬で行って，木のところへたどり着いたとき，最初に馬がいないた者が王様になるのだ，と言いました。息子たちのうちの一人に忠実な召使がついていて，この召使が主人に言いました。「ご主人様，お喜びください。明日私があなた様を王様にしてさしあげます。」召使は朝早く雌馬のところへいって，尻尾のしたのところをなでて，手を汚しました。牧場の木のところまで来ると，召使は主人から馬をうけとり，馬の口と鼻のまわりを例の汚れた手でなでまわしました。雌馬の匂いをかぐやいなや，雄馬はいななきだして，止めようとはしませんでした。そこでその息子は王様になり，以後その召使を寵愛し，重用しました。

第三百六十二話　冗談
すぐに金持ちになった家畜番のこと

ミラノの大公の宮廷に一人の男がいました。この男は騎兵隊で大公に忠実に仕えていたのですが，それでは何の貯えも得られないので，考え込みました。「お前もいくらかの貯えを得るには，どうしたらいいのだろう。領主様のお役人たちはみんなお金持ちになっている。」この男は領主のとこ

ろへやって来て，数年間領主の家畜の番人の役を与えて欲しい，飲食物も報酬もいらないから，と頼みました。領主は喜んで，男にその仕事を十年間文書で保証しました。領主は家畜の飼育に報酬，給金等膨大な費用を支払っていたからです。ところで，この男は有能な家畜番でしたので，少し離れた町に手紙を書きました，噂によればその町には良い牧草地がある由，そこへ行って，領主の家畜に草を食べさせたい，という内容です。町の人々は驚き，当然のことながら，領主の家畜が牧草地の草を食い尽くして，自分たちの家畜は食べる草が無くなるにちがいない，と恐れました。そこで町の人々は男に金貨二十枚ほどを送って，牧草地を使わないで欲しい，と言いました。家畜番は考えました。「しめしめ。」それから別の土地に手紙を書きますと，またもやお金が送られてきました。こんな調子で男はまもなく三頭立ての馬車に乗り，狐の毛皮の服を着るようになりました。領主は男にどうしてそうなったのかと尋ねました。男は言いました。「閣下，これにはちょっとしたわけがあります。これほど低い役職もございませんが，役得はあるのでございます。」ほかの人ならこう言うかもしれません。「そんなの極刑ものではないか。」

第三百六十三話　冗談
主人に驢馬にしてほしいと言った料理長のこと

ミラノの大公が一人の料理長を召し抱えていました。この料理長は大公に長い間忠実に仕え，口にあうものを作ってきました。ある時大公は料理長を召しだして言いました。「料理長よ，お前は長い間忠実に仕えてくれた。何なりと所望せよ。望みのものをとらせよう。」料理長は言いました。「私の望みはただひとつ，驢馬か道化にしていただくことです。」領主は言いました。「なぜだ。」料理長は言いました。「そのわけは，閣下が驢馬や道化を寵愛なさるからです。驢馬や道化を閣下はほめたたえ，高く用いておられるからです。だから私も驢馬か道化になりますれば，閣下の寵愛が得られましょう。」

第四十章　下女について

第三百六十四話　冗談

下女が二羽のローストチキンを平らげたこと。

一人の主人がいて，下女を一人抱えていました。その女はつまみ食いが好きでした。ある日曜に，主人は自分の所で夕食をするようにと，一人の若者を招待していました。そこで下女に言いました。「鶏を二羽焼いてくれ。客を一人招待しているんだ。」さて鶏が焼けてみると，大変美味しそうな匂いがしたので鶏を二羽とも食べてしまいました。そこへ戸口の二つある台所に客が入ってきて，料理女に言いました。「御主人はどこかね。」女は言いました。「あそこに立っておられるのが分からないのかね。ナイフを研いでお前さんの両耳を切り落とすつもりだよ。先週の今日，客の耳を二つとも切り落としたんだよ。」そこで客は逃げて行ってしまいました。

主人が台所に入ってきて，言いました。「鶏をどこへやったのか。」女は言いました。「お客が持って行ってしまいました。あそこに走って行くのが分かりませんか。」主人はナイフを手にもって追いかけて行って，ナイフを持った手で合図をして，叫びました。「私に一つだけくれ。」客はなお一層速く走りながら言いました。「おまえさんには一つもやれない。」主人は客にローストチキンを一羽返えさせようと思い，客は主人に耳を一つ取られることになると思ったのでした。こうして下女は涼しい顔をしていられました。女たちの悪知恵はここにも見られるでしょう。

第三百六十五話　冗談

下女と奥さんが，お互いに沢山の金がもらえるように言い合ったこと

一人の女主人がいて下女を使っていました。下女は長いこと女主人のもとに仕えていましので，この二人は互いによく分かっていましたし，互いに悪態をつきあってもいました。二人は懺悔をして，仲直りをしました。しかし，もし一人が相手のことで腹を立てると，こんな風に言うことになっていました。「神様があなたに一ペニッヒ下さいますように。」しばらくして，ある時客がありました。下女が些か怠けたので，女主人は腹を立

てて言いました。「神様があなたに一ペニッヒ下さいますように。」すると下女は言いました。「神様があなたにペニッヒ銀貨を下さいますように。」そこで女主人は言い返しました。「神様があなたに一グルデン与えて下さいますように。」下女は言いました。「神様があなたに財布一杯のお金を与えて下さいますように。」そこに居合わせたお偉方たちは言いました。「奥さん，なぜ下女のことをそう怒るのですか。あなたのためになることしか言っていませんよ。グルデン貨の入った財布なんていいことですよ。」女主人は言いました。「そうです，あなたたちはこのお金のことが良くお分かりになっていないのです。私にはそのことがよく分かっているんです。」

第四十一章　従順について

第三百六十六話　冗談
燈明で卵を焼いた男のこと

一人の跣足会修道士が胡桃などを貰いに托鉢にだされました。しかし集めたものを，正直に出すように指示されていました。修道士は施し物を集めて，おそらく四，五個の卵と一切れのパンを取っておき，朝のミサの後でそれを食べました。この僧がそのことを告白したとき，聴罪師はこれを叱って，「あなたは従順でなかった」と，言いました。この修道士は悪魔に罪をなすり付けて，言いました。「悪魔がそう忠告してくれたのです。」すると悪魔が上空にあって，言いました。「おまえは俺のことで嘘をついている。おれはお前ほど狡くはないぞ。お前がしたように，卵を燈明で焼くなどとは知らなかった。」

第三百六十七話　冗談
したいことをしたのに，従順であるということになった男のこと

ある時落ちぶれた貴族が聖ベネディクト会の修道院に入り，助修士となりました。修道院長がこの男に厩の掃除だとか，錫の食器拭きといった仕事をするように命令すると，男は言いました。「院長様，私は貴族で世間では貴ばれていたことを考えても見て下さい。このようなひどい仕事を私にお命じにならないで下さい。それは私の恥というものでしょう。」しかし修

道院長が「助修士よ，用意をしなさい。明日馬で出かけようと思う」とでも言うと，助修士は言いました。「かしこまりました。院長様。私は貴方に従順でなければならないので，髪を下ろしてもらいました。」

これが今でも，私たち修道院の者たちの習慣になっています。これはこの者たちが自分たちの意志に合わせて師を持ち，やる気のあることだけを言いつけてもらうからです。また早朝のミサに行くなど意にそわないことを言いつけられでもすると，言い訳をして，他の人に命じてくれるように言います。誰もが多くし過ぎることを恐れているのです。

第三百六十八話　冗談

王が自分の三人の息子たちに，それぞれ一切れの林檎を与えたこと

フランスのカロルス王はいつも食後居残って，林檎を一つ自分で皮を剝いて食べるのが習慣でした。ある時三人の息子が居合わせたので，息子たちがどれほど従順なのかはっきりさせたいと思いました。ゴバンドゥスという名の長男を呼んで言いました。「私の所にきて，お前の口を開けて，私から林檎一切れ受け取りなさい。」ゴバンドゥスは言いました。「王様，あなたから林檎を一切れ貰ったりしたら，それは私の恥です。林檎は自分で食べられます。」王はホノニーケという名の二番目の息子を呼んで，言いました。「来て，お前の口で私から林檎一切れ受け取りなさい。」ホノニーケは言いました。「あなたは私の父上です。あなたは私をあなたのしたいようにできます。私はあなたに従順でなければなないことは当然のことです。」そして父のところへ行き膝まずいて，一切れの林檎を口でうけとめました。すると王は言いました。「私はお前をフランスの王にする。」そしてロタリウスという三番目の息子を呼んで言いました。「来て，林檎を一切れ受け取りなさい。」ロタリウスはそうしました。すると王は言いました。「お前をロートリンゲンの領主にしよう。」ゴバンドゥスはそれを知って，父の所へ行き，言いました。「王様，口を開けます。私にも林檎一切れ下さい。」すると王は言いました。「おまえは来るのが遅すぎた。お前には林檎一切れも国も民も与えない。」その後フランスでは，「ゴバンドゥスよ，大口を開けるのが遅過ぎた」という諺が生まれました。

第四十二章　宿屋や居酒屋の亭主について

第三百六十九話　冗談
一種類の酒だけを飲まねばならなかった男のこと

らしゃ商人がある時ローマへ出かけ，イタリアで，ある宿屋に着きました。亭主は彼に良いワインを持って来ました。この商人は喜んで飲みましたが，亭主はその後，別の種類のワインを持って来て言いました。「お客さん，このワインも飲んでみて下さい。」客は言いました。「わしは体質が悪くて，同じ酒でなければならないんだ。」それ以上のものは出て来ないということを，彼は知っていたのです。亭主は思案しました。「次の時こんな風に，得にはならないだろう。」この客は，ローマから再び戻って来る時，いつこの宿に，良いワインに着けるのかと，毎日，日にちを計算しました。彼が宿に着くと，亭主は悪い酸っぱいワインを出しました。さてこの客は，美味しい食事に良いワインを飲もうとしましたが，不満そうに顔をそむけ，亭主を呼んでそれを飲むように渡しました。亭主が飲むと，客は言いました。「お客にこんな酢を飲ませるのかい。」亭主は使用人を怒って呪い，誰がそのワインを出したのだと言いましたが，誰もそれをやったと言おうとしませんでした。最後に亭主が言いました。「お客さん，こういう飲物を出して，これほど残念なことはありませんが，もっと残念なことは，あなたには別のものを出してはならないことです。あなたはこの前，酒は一種類でなければならぬ，二種類の酒を飲むと病気になる。それがわしの体質だとおっしゃいました。」こう言って亭主は，また別の宴席に近づいて行きました。

第三百七十話　冗談
主人の望むことはするが，命ぜられたことはしない下男の話

昔居酒屋の亭主がいて，下男を雇っていました。彼はこの下男と申し合わせをして，ワインを持ってくるよう下男に命令する時には，直接言わないで，符丁で言うことにしました。ある時客があって亭主は下男に，非常に良いと思われるワインを，樽から持ってくるよう命じました。すると下

男は，別の種類のワインを持って来ました。この客は，良いワインでないことがその香りで分かり，下男をひどく叱って呪いました。亭主は言いました。「お客さん，そんなに厳しく叱らないで下さい。この下男は，私が命令したことはやらなくても，私の望むことはやるのです。」

こんな不誠実な人々は少しですが，こういう人々は，一つのことを命令しても別のことを望んでいるのです。

第三百七十一話　冗談
うまく飲み干し終えた客のこと

ある時一人の客が居酒屋に入って来て，亭主にワインを一マース持ってくるように命じました。使用人が一マースのワインをそこに置くと，グラスを取って洗いに行きました。その間にこの客は，一マースのワインを飲み干しました。使用人がグラスを持って戻って来て，注ごうとすると，ワインがありません。それで言いました。「ワインはどこへ行ったんでしょう。」すると客は言いました。「お客に空の入れ物を出しておくのか。」こうしてこの使用人は，ワインをもう一マース持って来ました。

第三百七十二話　冗談
ワインを沢山こぼした亭主のこと

昔居酒屋に亭主がおりましたが，この男はしばしばワインを一マース，お客のテーブルの上で，テーブルクロスにこぼしました。彼はそのテーブルクロスを折り畳んで，大きな声で言いました。「ここで洗濯しましょう。」こういうことを彼は，ワインを沢山売るためにやったのです。それを一人の男が知って，樽から栓を抜いたので，ワインが流れ出ました。二人の争いは裁判になりましたが，この男は，亭主の習慣がどのようであったかを申し立てて，言いました。「彼はテーブルの上で洗濯をしようとしました。それで私は酒蔵で洗濯をしようとしたのです。」こうして亭主は，損害に加えて嘲笑されることになりました。

第三百七十三話　冗談
テーブルが枕とベットで，その上で用を足した男のこと

人が休む時刻になった時，ある宿屋に一人の客がやって来ました。それぞれが寝室で寝かされましたが，彼だけは例外でした。みんなが眠ってしまうと，この男は大きな声で言いました。「亭主，どこで横になるのだ。」亭主は言いました。「その部屋の中のテーブルの上に，敷布と枕と布団があります。」この男は，朝立ち去る時，テーブルの上で用を足し，テーブルの板を閉じました。それは折り畳みのテーブルだったのです。そして亭主に言いました。「敷布と枕と布団は，全部並べてテーブルの上にあるよ。左様なら，ご機嫌よう。」亭主は「結構です」と，言いました。亭主がその部屋に入ると，悪臭がしました。みんなが椅子の下や，暖炉の後ろを探しましたが，何も見つかりません。その後テーブルの上に，お宝が鎮座しているのを見つけました。亭主は言いました。「あいつは正当なお返しをしてくれた。あいつに寝室で寝るように言ってやったら，こんな悪いことはしなかったろうに。」

第三百七十四話　まじめ
宿の女将が，酒樽に桶一杯水を入れたこと

ある居酒屋に客がいました。その中の一人が，女の子に言いました。「水をコップ一杯持って来てくれ。ワインに入れたいんだ。」その女の子は言いました。「そんなことしなくていいわよ。母ちゃんが今日始めに大きな桶で一杯，樽の中に入れたわよ。」

子供と阿呆と酔っぱらいが真実を言うというのは，本当のことです。しかし水からワインを作ることのできたキリスト（ヨハネによる福音書　第二章）から，その技を見習った居酒屋の亭主たちは，神様の所へどんな顔をしてやって来ようというのでしょうか。どんな風に懺悔をし，改心するのでしょうか。どんな顔をして秘蹟を受けに行くのでしょうか。貧しい人がワインを買おうとすると，あなたはお金と引換に水を渡します。あなたは質の悪い金では決して嬉しい顔を見せませんが，もっと金持ちになるということもないでしょう。あなたは，私たちが次ぎに読む，農婦のように

なるのでしょう。

第三百七十五話　冗談
三枚目の銀貨を海に投げ込んだ猿のこと

ある町に一人の市民がいて，聖墓へ巡礼に出かけました。航海中，彼は自分の財布を身近に置いておきました。その時，猿が一匹船の中にいましたが，この猿は，その財布を素早くひっつかむと，船のマストの上に持って行き，その中に何が入っているか見ました。猿は，財布の中に見つけた物を，いつも三つ目の物は海の中に投げ込み，二つの物は船の中に投げ下ろしました。猿は二枚の銀貨を船の中に投げると，三枚目は海に投げ込みました。この善良な巡礼は，猿が船の中に投げ捨てた金を拾い集めました。その後猿は，財布を船に投げ捨てました。

この巡礼は故郷に戻ると，猿とのいきさつを，妻に話しました。すると妻は言いました。「そうなったことを喜ばねばなりません。私があなたに余分に差し上げた金は，ミルクを売って得た金で，ミルクの三分の一は水だったのです。主なる神は，あなたが聖なる旅を正しくない金で行うことを，望まれなかったのです。それで猿が，三枚目の銀貨を海の中に投げ込んだのです。」

第四十三章　賭博師たちについて

第三百七十六話　冗談
息子に賭博の全ての手管を習わせた父親のこと

ある父親に一人の息子がありました。息子は賭博師になりたがっていました。父親は息子を叱り，牢に入れさせたり，鞭打たせたりしましたが，全てが何の役にも立ちませんでした。父親は息子がどうしても賭博師になりたいのだと知ると，息子が賭博を教えてもらって，賭博の全ての策略と，手管やごまかしができるようになるために，息子をその国にいた一番腕の良い賭博師たちのもとに奉公させました。つまり，ごまかしのない賭事などというものはないので，息子が賭博師たちに欺かれないようにするためにです。こうして二人は目が眩んでしまったので，二人にとって余りにも

不幸なことになっていはしまいかと心配です。そのことをよく考えなさい。

第三百七十七話　冗談
仲間の集会で糸を紡ぐべきだということ

ライン河畔のある町の市参事会で，一人の男が，町の全ての居酒屋や酒場で，賭博を禁止するべきだと切り出しました。市参事会の何人かはそれに賛成で，何人かは反対でした。その件について十分相談をし，決定したいということになり，市参事会の日程が定められました。するとその時，市参事会にいた別の男がこう言いました。「皆さん，あなたがたは皆，賭博を禁止したいと思っていますし，ほとんどの人がそれに賛成で，市民たちが酒場にやって来た時にすべきでないことを評議しています。でもあなたがたのうちの誰も，何をするべきかを評議しようとはしません。」他の市参事会員たちは，何をすべきかということについての，その人の意見を述べるようにと言いました。そこでその人は言いました。「私の提案は，皆に糸を紡ぐために，糸巻き竿をあてがうことです。あなたがたは馬鹿げたことをしています。市民たちは滅多に寄り集まったりしません。そして，もし彼らが集まるようなことがあれば，彼らは例えば飲み代を賭けて遊戯盤で賭けをしたり，あるいは一ペニヒを賭けてカード遊びをしたりする以外に，いったい何をしろと言うのでしょう。あなたがたが良くご存知の大賭博や，大法螺や，高利貸しや，先物買いや，姦通を禁止しなさい。そうして，人々が楽しみのためにしている小さな賭博は，そのままにしておきなさい。」つまり，何も決まりませんでした。

第三百七十八話　まじめ
妻のベルトを持っていた男を悪魔が連れて行ったこと

シチリアのとある町に一人の若い職人がおりましたが，大賭博師で，瀆神者でした。ある時この職人は，妻からこっそり金のベルトを取って，もし賭博で負けて金をなくしてしまっても，そのベルトを売ってまた賭博をして過ごすために，懐にしまい込みました。賭博師たちは，ある市民の家の前にある店にやって来ました。彼らがこうして賭博をしていると，王様

の代官がやって来て，件の若い職人に言いました。「お前さん，修道院の庭へ行って，私に夕食用にサラダ菜を取って来てくれないか。それしか食べる気がしないんだ。」職人は言いました。「いいですよ，旦那さん。」そして自分の金を取って出かけて行きました。その途中で悪魔が職人を心身共に奪い，連れて行ってしまいました。主人はサラダ菜を待っていました。でも誰も来ませんでした。それで主人は怒って，職人の家，そして町中職人を捜させましたが，見つかりませんでした。

ある時，一隻の船がシチリアにあるヴゥルカヌスという名の山の前へと進んでいました。そこには炎が上がっているのが見え，女や男の悲痛な叫び声が聞こえ，人々は地獄の入り口がそこにあるのだと思いました。その時恐ろしい叫びが聞こえました。それはこう言っていました。「船長さん，船長さん。」船長は返事をしませんでした。その後にもっと恐ろしい声が聞こえてきました。「船長，船長。」船長は今度も黙っていました。三度目に声は言いました。「おまえが俺に返事をしないつもりなら，船を沈没させてやるぞ。」船中の人々は泣き叫び，船長に返事をするようにと言いました。船長が言いました。「おまえは誰なんだ。」声は言いました。「俺は悪魔だ。」船長が言いました。「おまえの望みは何だ。」悪魔が言いました。「王の代官に，もう職人を捜すなと言え。というのはあの職人が賭事に卑しいから，俺が奴を迎えに行って，永遠に焼かれねばならない地獄へ連れて来てやったからだ。」そして，職人の妻のベルトを船の中へ落として言いました。「そのベルトを奴の女房に返してやれ。奴はそれを懐に持っていたのだ。」

悪魔は職人の妻にベルトを返してやりましたが，悪魔が正義漢であったから，不当に得た財産を返した訳ではないのです。そうではなくて，妻がそのベルトのことをもっと喜んで自慢するためにしたのです。というのは，女性が自分の身体で自慢できる最も大きな虚栄は，象眼したベルトだからです。なぜでしょう。ある予言者が言っているように，そこには謙遜の大部分の素材である，胃や内臓があるからです。Mich. 6. Humiliatio tua in medio tui.（ミカ書第六章　おまえの謙遜はおまえの中心にある。）[1]「おまえの謙遜は身体の真ん中にある。」上等のワインの入った一フーダー

1　出典は不明。ミカ書第6章に該当する文はない。

の樽を，いくつかのたがで締めることができます。たがは一個が三ペニヒかそこらです。そして汚物入れ，すなわち身体は三十グルデンか四十グルデンするベルトで締めなければなりません。婦人たちは，垂れ下がったベルトの端をとても自慢します。それはベルトの垂れ飾りと言います。彼女たちはベルトの垂れ飾りを肩ごしに背中に投げかけます。ベルトの垂れ飾りを背中に投げかける婦人たちに災いあれ。

第三百七十九話　冗談
賽子を投げた泥棒のこと

昔，魔術のできる，世慣れた学生がいて，強盗や盗みで人々に多大な損害を与えていました。そして誰もこの学生に近づくことができませんでした。学生は捕らえられて，ある権力のある未亡人の前へ連れて来られました。未亡人は学生に，そんなに上手に盗めるなんて，どうやったのかと尋ねました。学生は言いました。「奥様，私は一個の賽子を持っていて，これを投げます。賽子には目が三つしかありません。最初投げると賽子はこう言います。『行け。』二度目に投げるとこう言います。『すぐ行け。』でも私はまだ行きません。三度目に投げると賽子はこう言います。『すぐ行け。おまえは安全だ。』さもなければ黙っています。そういう場合は私は逃げます。」貴婦人が言いました。「それなら今回はどうしたのですか。どうしてその秘訣がうまく行かなかったのですか。」学生は言いました。「私はいつものように賽子を三度投げました。そして賽子はいつものように私に答えもくれました。でも三度目に当てそこなって，私を欺いたのです。それで私は捕らえられてしまいました。」こうして学生は縛り首になりました。

罪を犯して逃げて行く多くの人々が同様です。しかしこれらの人々は，安全だと思っている時に欺かれるのです。というのは，こういった人々は，ほとんど思ってもみない時に欺かれ，死ぬからです。なぜなら死は盲目で，誰をも考慮しないからです。

第四十四章　お世辞上手の取り巻き連，いわゆるへつらい者たちについて

第三百八十話　冗談
狐がお礼に三つの知恵を授けたこと

昔一匹の狐が海を渡りたいと思い，ある船頭の所にやって来て申しました。「私を海の向こうに渡しておくれ，そうすればおまえに三つの知恵を教えてあげよう。そのうちの二つは今すぐ，残る一つはおまえが私を向こうに渡してくれたときに教えよう。」船頭は申しました。「それでは最初の二つを私に教えておくれ。」狐は言いました。「とかく他人が甘い言葉を掛けてくるときは，おまえを瞞しているか，瞞そうとしているかだという，これがその第一です。第二の知恵は，誰かがおまえを瞞しているときには，おまえにお世辞を言い，言葉巧みな話しのやりとりをするということですよ。」船頭は狐を向こうに渡してやりました。さて彼らが渡り終えて向こう岸に着いたとき，狐は言いました。「それでは三番目の知恵も教えてあげよう。Officium perdit, dico, qui servit iniquo.（私は言う，悪しき事に奉仕する者は，仕事を失う。）ということ，つまり悪い事に力を致す人は，その奉公口をなくしてしまうということです。」

へつらう人たち，お追従を言う人々はまさにかくのごときもので，こういう人々は他人を誉めそやし，ただただ己れの思うがままに，他人を欺くことができるよう，最高の世辞を振りまくのであります。ご婦人方や娘御は，自分たちに対して何かと耳ざわりの良い言葉が向けられることは先刻承知のくせに，その後で瞞されると，恥辱をこうむったとの理由で，瞞した人間に対して，まるで蜘蛛に対するかのように敵愾心を抱きます。それゆえ，追従者やお世辞屋は蟬かキリギリスみたいに，ただ夏の間だけ，わが身に事が旨く運んだ，その幸せを歌うのです。また彼らは，人々を溺れ死にさせようとして歌い掛けてくる，海の妖精ジレーネのような者たちであります。それゆえ，教会法が言うように，君を誉めたり，君を非難したりする人々が，必ずしもすべて君の友人の者たちとは限らない，ということが最後になって判ってくるのであります。

第三百八十一話　冗談
猿どもが真実を述べた男を引き裂いたこと

ある時，イタリヤに住む一人のドイツ人とジプシーの男，または異教徒などと呼ばれる男が旅に出て，とある森の中にやって来ました。ここでは，猿の王様がその一族に君臨しておりましたが，その猿どもが二人を捕まえて，かれらの王様の前に引っ立てて行ったのでした。王様はイタリヤ住まいのドイツ人に申しました。「俺の一族とこの俺をどう思うか。」「あんた方ほど素晴らしい人々は，この地上にはいやしませんよ。」そして，それらしく彼らを誉めそやしました。王様はその男を自分の傍らに座らせ，手厚く礼を尽くしました。それからジプシーの男に向かって話し掛けました。この男は先を見通すことができました。「あの男は嘘をつき，しかも尊敬を得た。『我々をどう思うか』との問いに，もし私が自分の考えているとおりを述べたら，どんな扱いを受けるのだろう」とは思いましたが，しかし言いました。「あんた方は私の気に入りません。あんた方はこれぽっちも素晴らしいところなんかありゃしません。尻を隠すことができないから，みんなに見せ放しです。」これを聞いて，猿たちは男に一斉に襲いかかり，男を牙で引き裂いてしまいました。とかく，この世の中は，いまだにそんなものであります。

第三百八十二話　冗談
草を食べても人には媚びなかったディオゲネスのこと

昔，シラクサナの町に専制君主が居りました。強大な王でその名をディオニシウスといいました。この人は気の毒な者たちを数多作りましたが，その中にあって，ディオゲネスという一哲学者をもまた破滅させたのでありました。それというのも，ディオゲネスが王に対して真実を述べたからであります。ある時，ディオゲネスはサラダ菜か何か分からぬ草を洗って，空腹を凌ぐためにこれを食べようとしていました。この様子をくだんのディオニシウスの召使いが見ていて，ディオゲネスに言ったのでした。「もしお前がわしのご主人ディオニシウス様の思し召しに従う心算りがあれば，雑草など食わずと，もっと良いものが食えるのに。」ディオゲネスは言

いました。「お前も雑草を食べるつもりになれば，なにも主人のディオニシウスの御機嫌をとったり，お世辞を言ったりするに及ばぬものをなあ。」

これは本当の話です。なぜなら君主の館にあっては，だれもが飲み食いの糧を得るために，ひたすらご主人様の機嫌を取り結び，嘘を吐いてはご主人様の物を掠め，ご主人様のおっしゃる事はなんでも，はいはいと認めるのであります。主人がたれかを誉めれば家来もその人を誉め，主人がたれかを咎めれば家来もまたその人を咎めます。おべっかを使い，這いつくばってお余りを頂戴するような手合いは，気の毒とも惨めとも申すべきでありますし，おまけに不幸な人でもあります。彼らは他人を両天秤にかけ，饒舌をもってこれを瞞まし，二つの鞍に乗ります。つまり二人の主君にまみえて，しかもどの主人にも心を許さないのであります。ひょっとすると，彼らの主人は二人どころか三人かも知れませんが。

第四十五章　歌舞音曲について

第三百八十三話　まじめ
悪魔，踊りの場に赴くこと

ドイツの国でのことです。ある村で，踊りに合わせて笛を吹くようにと，一人の笛吹きが雇われていました。隣村の人々もその村へ踊りにやって来ました。すべての村で笛吹きを雇うわけにはいかないのです。その年には，たまたま，笛を吹き太鼓を叩くこの男が病気になり，告解し，死を予想して，司祭に，これからはもう決して踊りに合わせて笛を吹いたり太鼓を叩いたりしようとは思わない，と約束しました。それから三度目の日曜日に，司祭は，誰かが踊りに合わせて太鼓を叩いているのを聞き，「あの男，約束したばかりなのに，もうまた堕落したのか」と考えて，踊りの場へ行き，あの男かどうか，覗いて見ました。そして，その場へ来ると，あの男がそこに座っているのが見えました。踊りに合わせて太鼓を叩いているのです。しかし，司祭は事情をよく調べようと思い，笛吹きの家へ行って見ると，笛吹きはベッドに寝ていました。そこで，司祭は教会へ引き返し，ストラ（頚垂帯）を取って，踊りの場へ戻り，悪魔の首にストラを投げかけて，言いました。「頼むからぜひ言ってくれ，お前は一体誰だ。」悪魔は言

いました。「おれは悪魔だ。おれの家来になるのをやめた奴のお陰で，今日という日に，こんなひどい目にあわされるとは残念だ。あいつの首根っこをとうの昔にへし折っておかなかったのが悔しい。自分であいつの代わりをしたんだからな。」そう言うと，悪魔は並み居るすべての人々の目からかき消えて，あとに物すごい悪臭を残しました。

第三百八十四話　まじめ
説教師，太鼓を突き破ること

一人の説教師がおりました。午後説教をしていると，近くで人々が踊っていて，太鼓の音が邪魔になるので，説教を聞いている人々に「ちょっと待っていて下さい。すぐ来ますから」と言って，太鼓叩きの所へ行き，ナイフを突き刺して太鼓を切り裂いてしまいました。居合わせた仲間たちは，司祭に襲いかかり，殴ってひどい目に合わせ，悪魔のしもべがそれほど不名誉な仕打ちを受けた，と詰りました。秘蹟を持ったどこかの司祭が不名誉な仕打ちを受けても，この仲間たちは，悪魔のしもべがここで名誉を傷つけられた時のようには，振る舞わなかったでしょう。みんな，自分はキリスト教徒だ，神のしもべだと言いながら，本当は悪魔のしもべであることを暴露したのです。

信心深い男は，妻も娘も踊りに行かせてはいけません。妻や娘が，出かけた時と同じ状態で戻っては来ない，とあなたは確信してよろしい。女たちは求め，あるいは求められて，その手を不純の手に握られているのです。勿論，悪いことは何もされてはいない，とあなたは言います。しかし，今縦糸を張るのは，あとで織り上げるためなのです。

第三百八十五話　まじめ
牡牛，踊り好きの女を引き裂くこと

ブラバントのある村に一人の女がおりました。踊りと聞けば，必ず出かけて行き，その日が祝日にでも当たって，人々が踊ろうとしないときでも，踊りの支度をしました。ある時，日曜日に，近くで射的会があり，一本の矢が的を外れ，そこで踊っていた一人の女が，踊りの場所で矢に刺されて死んでしまいました。もう遊びどころではなく，女は家へ運ばれ，棺台の

上に寝かされて，土地のしきたりに倣って遺体の周りで通夜の祈りを上げるようにと，司祭たちが呼ばれました。司祭やそのほかの人々が集まると，悪魔が黒い牡牛の姿でやって来て，棺台をひっくり返し，踊り好きの女の体を角で引き裂いたので，はらわたが跳び出しました。すると，物すごい悪臭が立ちこめ，誰もそこに居たたまれないほどでした。牡牛は消え失せて，引き裂かれた女の体は，朝になって悪臭の消えるまで，放って置かれました。この女は，当然のことながら，不浄墓地に葬られました。

踊りの好きな方，気をつけなさい。

第三百八十六話　冗談
ある男，馬を欲しがること

一人の市民がおりました。馬を一頭飼っていました。まことに美しい尻尾を持っているので，隣の騎士がその馬を欲しがり，売ってくれるように市民に伝えさせました。男は，尻尾が美しいので騎士が馬を欲しがっていると聞いて，尻尾を切り落とさせました。すると，騎士はもう欲しいと言わなくなりました。

このように，あなたの妻やあなたの娘は，飾り立てめかし立てて，ひたすら踊りへと出かけます。女たちの晴れ着を隠すか，着るのを禁じてごらんなさい。それだけで，踊りをやめさせたことになります。あなたの猫をあなたの妻や娘たちより可愛がらないようにしなさい。誰かが，毛皮が美しくすべすべしている猫を飼っていて，そのためにひょっとしてその猫が野生になり，外へ出て行って，家から家へとほっつき歩き，めったに自分の家にいなくなるようになったら，片方の脇腹の毛を焼き切って，斑にしてやります。そのあとはずっと自分の家にいるようになります。あなたの召使たちに，牛小屋にいるままの姿で踊りに行け，と言ってみなさい。召使たちが行くか行かないかがよく分かります。実際，女たちは，こういう事を説教されるのを，どんなにか嫌がることでしょう。しかし，女たちが，このあとの話に出て来る男のようなことにでもなれば，家でそう言われる方がよかったのに，と思うでしょう。

第三百八十七話　冗談
炭火がコートにはねること

二人の仲間が，暖房のできる部屋のない所ではそうするように，火にあたって，ぶどう酒を飲んでいました。すると，真っ赤に燃える炭火が一人の仲間のコートにはねました。もう一人の仲間はそれを見て，注意しようともしないで，言いました。「あんた，何か新しい話でも聞きたいかい。」相手は言いました。「うん，良い話なら聞きたいね。悪い話ならご免だよ。」その仲間は言いました。「良い話じゃないよ。」相手は言いました。「それなら聞きたくないな。」火が燃えて，焦げくさい臭いがし始めました。見ると，炭火が自分のコートにはねて，大きい焼き穴を作っていました。その仲間は言いました。「おれはさっきから見ていたよ。」相手は言いました。「なぜ言ってくれなかった。」その仲間は言いました。「あんたは，悪い話はしてくれるな，と言った。炭火があんたのコートにはねたというのは悪い話だよ。」

こういうことになる人はかなり大ぜいいるでしょう。損害を受けることにでもなれば，前にそう言ってくれたら，と思うでしょう。その人が今は，注意してくれる人を憎むのです。気をつけなさい。

第三百八十八話　本当のまじめ
一年中踊り続けたザクセンの人々のこと

ハインリヒII世皇帝の時代の十年目のことですが，ザクセンのある村で悲しいことが起こりました。その村は聖マグヌスが守護聖人で，そこの教会に神父がいて，ロベルトゥスと言いました。クリスマスの夜，彼は真夜中に最初のミサを唱え始めましたが，この時，十八人の人々が墓場で歌を歌って踊り始めました。男と女でした。一人の男はオトベルトゥスと言いましたが，彼がこの戯れのお膳立てをしたのでした。祭壇の司祭には邪魔になりましたので，彼らに大声を出すのを止めるように伝えました。しかし彼らは止めようとはしなかったので，司祭は言いました。「ええ，神と聖マグヌス様，奴らがまる一年踊らねばならないように望まれんことを。」この呪いが彼らを襲うと，もう踊りを止めることはできませんでした。この

司祭には娘が一人いて，そこで踊っていました。彼女の兄弟が走り寄って，腕を引っ摑んで踊りから引き離そうとしましたが，彼女の腕は身体から引き千切られ，血も出ませんでした。十八人はこうしてまる一年，食事も飲物もとらず，眠りもしないで踊り，歌いましたが，雨も雪も彼らの上には降って来ませんでした。彼らが踊っていたところは穴になり，彼らの腰紐のほどの深さになりました。彼らは疲れもせず，着物や靴も痛まず，まる一年踊っていました。さて一年が過ぎた時，ヘレベレトゥスと言う名前の司教がケルンからやって来ました。そして彼らを呪縛から解き放つと，彼らは手を互いに離しました。それから教会の聖マグヌスの祭壇の前に連れて行き，彼らの罪を赦しました。神父の娘は，他の二人の女性と共にすぐ死にました。他の人々は眠り込んで，まる二昼夜眠っていました。幾人かは死んで奇跡を行いました。というのは，彼らは罪に対して非常に後悔し，半ば死んだように踊っていたからです。生き長らえた人々は，国中をあちこち歩き回り，頭や手足を震わせていました。

第四十六章　休日について，それをいかに尊重するかということ

第三百八十九話　冗談
ユダヤ人が安息日と日曜日に雪隠にいたこと

ある時，一人のユダヤ人が土曜日に，キリスト教徒の家にやって来ました。そして誤って，雪隠，当時はこう言われていましたが，厠の肥溜めに落ちました。このキリスト教徒は，そのユダヤ人の家へ走って行って，彼の身内の者に引き上げてくれるように言いました。一人が言いました。「今日は駄目だ。今日は安息日だ。」しかし一人が出掛けていって，様子を見ようとしました。彼はやって来ると，こう言いました。「どうしてそんな中に入ったんだ。」ユダヤ人は言いました。「どうして入ったなどと聞かないで，どうしたら上へ上がれるをか聞いてくれ。」彼は言いました。「明日，引き上げてやろう。」翌日，梯子を持ってユダヤ人たちがやって来て，引き上げようとしました。すると，キリスト教徒が言いました。「駄目だ，駄目だ，哀れなユダヤ人よ。今日はわれわれの休日で，そんなことをしてはいけないんだ。昨日は，お前たちの安息日で休日だった。今日は日曜日で，われ

われの休日だ。」こうしてこのユダヤ人は，二日の間汚物と悪臭の中にいなければなりませんでした。

キリスト教徒が戒律を守るよりも，ユダヤ人の方がその戒律を，特に休日を守るということは，キリスト教徒にとって恥辱です。私たちは平日にやれないことを，休日にやり遂げます。私たちは一週間座って仕事をし，日曜日には博打をしたり，酒を食らったり，娼婦を追いかけ，あちこちの村へ行って借金を頼みます。そして荷車や馬車で，休日にも平日のように動きます。ユダヤ人や異教徒がそれを見れば，腹を立て，キリスト教徒にはなりません。それは，私たちが言葉で信仰というものを，それがいかに良く，正しいものであるかと誉め称えますが，行動でそれを満たすことがないからです。休日が事実十分にはないのです。貴族，ユダヤ人，娼婦，神父も同じです。というのは，そうでなく一週間が平日ばかりだと，良い月曜日にはなりません。謝肉祭という聖者にとっては，三日の休日，あるいはひょっとすると十日の休日となります。

第三百九十話　まじめ
犬の顔をした子供を生んだ女性のこと

昔一人の騎士がいましたが，大狩猟家でした。それで日曜日も聖人の祝日も考慮せず，いつも狩猟をしていました。彼の妻はそのことでしばしば非難しましたが，火のない暖炉を吹いているのと同じでした。彼女には，彼との間に可愛らしい立派な子供が沢山いましたが，ある時主なる神は，祝日を破ることがいかに不愉快なことであるかを，示そうとされました。そしてある時，この婦人に子供ができましたが，その子は，長い耳と大きな口のある，犬の顔をしていました。彼女の側にいた侍女たちは驚いて，その子を袋に入れて埋めることに意見が一致しました。その子が埋められた時，騎士が狩猟から帰って来て，妻がお産をしたのを見て取りました。侍女たちは，言い逃れをしようとして言いました。「お産がうまく行きませんでした。落ち着いて下さい。」この騎士は刀を抜いて，彼女に覆いかぶさるように立ち，子供がどこに行ったのか言え，と言いました。妻は子供を再び掘り出すように命じ，子供が運ばれました。騎士はその子供を見ると，驚いて気分が悪くなりました。妻は彼に言いました。「祝福されないあな

た，神が聖なる日や日曜日にあなたが狩りに出掛ける罪を，この印で啓示されたのです。」騎士は心を改め，二度と狩りを行うことはなくなり，悔い改めて贖罪をしたのでした。

この例に，他の方も驚き戒めとして下さい。

第三百九十一話　冗談
草刈人夫が金貨を一枚見つけたこと

ドイツでのことです。一人の騎士が広大な牧草地を所有しており，祝祭の前日に沢山の草刈人夫を雇っておりました。近くの全ての村々で終業の鐘が鳴ると，そこにいた人夫の一人が別の人夫に言いました。「おい，終業の鐘が鳴っているぞ。明日は祝祭日だ。晩拝式に行こう。明後日働けばよいよ。」仲間たちはその男を嘲笑しました。男は大鎌を樹に吊るして，晩拝式に出かけました。草刈人夫たちは自分の割当分だけを刈り取り，その男の割当分はそのままにしておきました。祝日が過ぎると，草刈人夫たちは再び仕事に出かけました。例の人夫は，仲間たちがそのままにしておいた自分の割当区域へ出かけ，遙か後の方から草を刈りました。仲間たちはずっと前の方にいて，男を嘲って叫びました。「もっとこちらへ，もっとこちらへ！」 男は黙ってじっとそれに耐えました。男がそんなふうにして後から草を刈って行くと，一枚の金貨が見つかりました。それは皿ほどの大きさでした。男はそれを拾い上げ，じっと見つめ，喜びのあまり泣き始め，ひざまづいて，主なる神に感謝しました。人夫たちや騎士がその男の所へ走りより，その貴重な宝物を見つめました。騎士がその銘を読みました。そこにはドイツ語でこんなふうに書かれていました。ラテン語でこんなふうに言われます。

Manus Dei me compegit	神の御手が私を閉じ込め，
Et in donum me redegit	私を贈られる，
Pauperi, qui non infregit	賑やかな祝日を駄目にしない，
Diem festo celebrem.	貧しき者に。

騎士は男を連れてその金貨を家へ持ち帰り，妻にそれを見せました。妻はその金貨を欲しがり，それを手に入れるのに，金一マルクに相当する物を男に渡しました。その後，その金貨は多くの者たちに展示されました。

第四十七章　嘘をつくことについて

第三百九十二話　冗談
男にもう一人女を与えよ，とパピリウスが伝えたこと

ローマでは，市民の子は九歳か十歳になると参事会へ通わせられ，若い時代から勉強する習慣がありました。どの子供もみな，父親の傍らに腰を下ろしました。ある日のこと，ローマ市民たちはいつもより長い会議があったので，あるお偉方の妻は，夫がいつ食事にやって来るかひどく知りたがりました。またそんなに長い間どんな事が議論されているのかを知りたがりました。さて彼女にはパピリウスという息子がありました。息子は父親と共に，長い間会議に出ていました。母親は鞭を用意し，そんなに長い間どんな事が議論されていたのか言いなさいと，子供を脅しました。子供は長い間話そうとしなかったのですが，最後に言いました。「男の人に，もう一人女を与えようと思っている人たちがいます。同様に参事会には，女の人にもう一人男を与えるべきであると考える人たちもいます。どちらが最善なのか分からないのです。この問題のために議論が長引きました。」その善良な婦人は，別の婦人の所へ行き，彼女にその話をしました。その話が広まって，およそ二百人の婦人が市役所へやって来ました。一人の婦人が代表して述べたのですが，婦人たちは，女にもう一人男を与えて下さい，男が二人の女を持つより，女が二人の男を持つほうが良いのです，と言いました。お偉方たちは笑い始めましたが，この問題がどこから出て来たのか分かりません。そこで，この奇妙な問題がどこから出て来たのか知る者はないかと尋ね回らせたのですが，それについて知る者は誰もいなかったのです。すると子供のパピリウスが泣き始め，母に会議の内容について話しなさいと強制され，風流な嘘を考え出した次第を話しました。こうしてパピリウス以外の子供は参事会に出てはいけないと定められました。

第三百九十三話　冗談
嘘つきはろくでなしにしかならぬこと

一人の市民がいて，息子に学芸・慣習・作法を教えてくれるようにと，

ある教師に頼んでいました。一，二年後，父親がこの町へやって来て，先生に息子がどんなふうに振舞っているか尋ねました。先生は言いました。「立派にやっています。」父親は言いました。「賭事もしていますか。」先生は言いました。「ええ。」父親は言いました。「賭事をしてもどうと言うことはありません。息子はまともになれるでしょう。」更に尋ねました。「息子は女遊びもしていますか。」先生は言いました。「ええ。」父親は言いました。「女遊びをしてもどうと言うことはありません。散々女遊びをした後息子はまともな人間になるでしょう。」更に言いました。「息子は嘘もつきますか。」先生は言いました。「あの子の言う事は何もかも嘘です。」父親は言いました。「はてさて，もう息子が立派になる期待は持てません。」

というのは，人間は年を取るほど，他の全ての悪徳が減るのに，嘘つきの罪を益々犯すようになります。だからといって，嘘をつくことは恥ずかしいことです。人間にとって信用以上の何があると言うのでしょうか。人間が信用を失えば，その人間はもはや取るに足りない人物なのです。嘘をつく事を好む者は，盗みも好むという諺があります。浮気と嘘つきと盗みは互いに離れられないとも言われます。でも少なからぬ人たちが言います。「そんな事は本当ではない。およそ悪人というのは，生まれながらにしてあらゆる悪徳を身につけているのだから。」

第三百九十四話　まじめ
二人の商人が金持ちになったこと

ケルンの町に二人の商人がいました。商人たちは司祭に，嘘をつかないでは何も売り買いできないと告解しました。司祭は言いました。「そんなことはありませんよ。一年間こうしてごらんなさい。思い通りに値段をつけなさい。他のやり方で売ってはいけません。でも一年間は辛抱しなければなりません。そうすると買い手や顧客があなたから離れて，他の場所へ行って，買ったり付けにしたりしてこんなふうに言います。『その値段ならあの商人から，それを買えただろうな。今と同じ位良いか，ひょっとしたらもっと良い品物を。』そうなると顧客はみなまた戻って来て，その上沢山の買い手も一緒に連れて来ますよ。」商人たちは言いました。「そんなふうにやってみます。」こうして商人たちは司祭が言った通りに，うまくいきま

した。一年が巡って来ると，商人たちは司祭の所へ来て，その良い教えに感謝し，その教えを守り，嘘をつくことなくお金持ちになりました。

第四十八章　秘密と秘密を守る人々について

第三百九十五話　冗談
騎士の体内から五十羽の烏が飛び出したこと

ある時騎士の奥方が，市参事会で何が相談されているのか，知りたいと思いました。騎士はそれを奥方に話そうとはせず，こう言いました。「お前たち，女はすぐ喋るからな。」奥方は言いました。「貴方たち，男のほうが私たち，女よりもよく喋りますよ。」ある時騎士は奥方を試そうと思い，腹が痛いと訴えました。奥方は言いました。「ご不浄へ行って来なさい。そうすればすぐ良くなりますよ。」騎士は言われたとおりにして，戻ってくると，こう言いました。「お前，もしここだけのことにしてくれるなら，内緒の話があるのだが。」奥方は言いました。「いいですとも。」騎士は言いました。「私のお腹から黒い烏が一羽飛び出した。それであんなに痛かったんだ。」奥方は言いました。「貴方，なおってよかったですわね。」朝になると，奥方は隣の内儀のところへ行って，夫の体内から黒い烏が二羽飛び出した話をし，このことは誰にも話さないでくれ，ときつく言いました。隣の内儀はこれを別の人に話し，そして体内から烏が三羽飛び出したと言い，それは町全体の知るところとなりました。最後には烏の数は五十羽になっていました。別の学者によると（烏ではなくて）卵の由です。

自分について何かがこれ以上話されたくない時は，自分自身が口を慎むべきです。貴方自身が自分のことについて内密にできないのに，他人がそれを内密にできるわけがありません。（次の話にでてくる）ある俳優の言い訳も同じでした。

第三百九十六話　冗談
町の服を売った男のこと

ある町で一人の俳優に町の色の服を与えました。ところがこの男はその服を売り，そのお金で博打をしたり，飲んだりしたことが，すぐ次の日お

偉方の耳に入りました。お偉方は馬鹿にされたと思い，なぜ服を大切にもっていなかったのか，と俳優に尋ねました。俳優はこう言いました。「皆様方，私はあの服をもっている気になれません。だって貴方たちだってあれをもっていられなかったじゃありませんか。」お偉方は言いました。「もっともだ。」

貴方が自分のことについてこれ以上話されたくないことを，自分で話してはいけません。誰も聞いたとおりには話し伝えません。例の詩人[1]がFama semper crescit eundo.（風評は進むにつれて常に増大す）と言っているごとく，常により多くの嘘が付け加えられるものです。

第三百九十七話　冗談

王様ミド[2]には驢馬の耳がはえていたこと

詩人たちの寓話にはミドという名の王様の話がのっています。その王様には驢馬の耳がはえていました。だから，王様はその耳を隠すために，頭にいつも頭巾を被っていました。王様には忠実な下僕が一人いて，その下僕に王様は事実を話し，下僕がそれを誰にも喋らないようきつく命じました。というのも，王様に驢馬の耳がはえているということは，大変不名誉なことだったからです。下僕はそれを口にしたいという大きな誘惑に駆られましたが，一週間は黙っていました。そしてそれをどうしても黙っておれなくなると，森へ行き，地面に大きな穴を掘り，腹ばいになって顔を穴に突っ込み，こうして二度穴のなかへ大声で言いました。「私の主人，王様には驢馬の耳がはえている。私の主人，王様には驢馬の耳がはえている。」下僕はその後穴を埋め戻し，帰宅しました。もう誘惑に駆られることはありませんでした。穴があった場所には葦が沢山はえました。そこへ牧人や羊飼いがやって来て，葦で笛をつくり，その笛を吹くと，出てくる歌詞は必ずこうでした。「王様ミドには驢馬の耳がはえている。」

この話は，自分自身について何か良くないことを内密にしておけない

1　Publius Vergilius Marco (BC 70–19) のこと。引用された句は "Aeneis" の中の一節。

2　Midas 王。ギリシャ神話に登場する Phrygia の王で，この話と手に触れるものすべてが黄金化した話で有名。

人々を戒めるものです。この話はまた，自分の心に何かひっかかるものがあって，たとえ愚痴でもいいから，それを誰かにすっかりぶちまけることができさえすれば，心が晴れるという人々を戒めるものです。こういう人々は修行が足りないわけで，自分の心のなかで醗酵できないのです。樽のなかだけで醗酵しているワインはどれも，樽の上へ吹き出るワインよりも上等です。先程述べた人々は，車で運ばれていく新しいワインの入った樽に似ています。その樽には穴をあけておかねばなりません。そうしないと樽の底がぬけてしまうのです。同様に先程述べた人々は，心のなかをぶちまけてはいけないと言われると，心臓が破裂すると思っているのです。

第三百九十八話　冗談
蝶のように軽率な助修女たちが
自分たちで互いに告解を聞こうとしたこと

噂によると，ある時大勢の助修女たちが集まり，僭越にも神父様をさしおいて，自分たちで互いに告解を聞こうとしました。そして代表を二人選び，教皇のもとに送って，自分たちで互いに告解を聞ける特典を賜るよう願い出ました。教皇は助修女たちが秘密を守れるかどうか，試してみようと思いました。そこで小鳥を一羽箱に入れ，それと何も書いてない文書を一通助修女たちに手渡して，上司のもとに届けるように命じました。助修女たちは嬉々として家路につきました。そして郊外に出ますと，箱の中に何があるのか気になり，箱を開けました。すると小鳥が一羽飛び去りました。助修女たちは教皇のもとへ引き返し，小鳥が逃げてしまったので，別の小鳥を賜りたいと願い出ました。すると教皇は二人を叱りつけて，こう言いました。「お前たちが告解を聞きあい，そして仲違いすると，お前たちは箱を開けるだろう，すなわち告解の内容を喋り，小鳥を逃がしてしまうだろう。」

第四十九章　平和と協調について

第三百九十九話　まじめ
口と手足が互いに不仲になったこと

ある時，胃と口が両手両足相手に喧嘩をしました。口と胃が食べ物全部を独り占めしたので，手足が腹を立てて，食べ物を口と胃に与えようとしませんでした。このことが数日続いて，手足はやせ衰えました。手足は漸く自分たちの間違いに気付いて，再び口と胃に食べ物を与えたので，事態はよくなりました。

私たち社会の成員は，すべてこの様に互いに係わり合っています。とりわけ修道院内はそうです。修道院長と修道士の間に若しかして争いが起きると，修道士たちの何人かは，「俺はもう食べ物を手にいれる仕事など，熱心にまじめにやる積もりはない。俺たちが手にいれたものを酒倉番や，院長や管理人が浪費してしまう。わしらが彼らに何も与えなければ，彼らもわしらに何も与えることはできない。それよりも，わしらが手に入れるものを彼等に与えれば，彼らは胃が手足に食べ物を与えるように，わしらにお返しをしてくれる。その方が旨く行く」と考えています。

第四百話　冗談
二匹の犬が狼を殺し。仲良くなったこと

ある騎士が猟犬を二匹飼っていて，それをとても可愛がり，またそれを飼うことを大きな喜びとしていました。ところがこの二匹の犬は，一緒に繋がれていると仲良くしていましたが，綱を解かれて解放されるや否や，二匹は互いに牙をむき，引き裂き合うようなことさえしかねないし，猟獣など見向きもしないという性質を持っていました。そこで騎士は，次のようにして犬を仲良くさせたらよいと，人に勧められました。まず一匹の狼を手に入れ，犬を一匹だけ狼に向けて放ち，戦わせなさい。その犬が負けそうになり，すっかり疲れたら，もう一方の犬を仲間の助太刀にいくように，その狼に向けて放ちなさい。そうすれば二匹の犬は仲良くなるでしょうとのことでした。騎士はその通りに振舞い，二匹の犬は狼を殺し，その

後は繋がれていようと，放たれていようと喧嘩もせず仲良くしていました。

なんとかして我々を引き裂いてやろうと，絶えず私たちの周囲をめぐり，うかがっている恐ろしい獅子や犬に対して，私どもはお互いに仲良くすべきでしょう。まことに聖ペテロのお言葉通りで，とりわけ婚姻関係においてそうです。貴方がたが，たとえ心を一つにしていようとも，そのおしゃべりと雑音でもって貴方たち二人の間を断ち，不仲にするような人々がいるのを見出します。

第四百一話　冗談
領主が髪の毛を抜いて二人の市民を和解させたこと

ミラノの領主が，長い間お互いを相手に訴訟を起こし係争中であって，誰もその二人を裁くことができないという，町の二人の市民のうわさを聞きました。領主は，「わしがその二人を裁いて仲直りさせてやろう」と言って，彼らを呼びに使いを出しました。さて二人がやって来て，領主がその一人の市民にこう言いました。「わしの処へ来て，白髪を一本抜いてくれないか。」その男はそうしました。その後領主はもう一人の市民に言いました。「こちらへ来て，わしの黒髪を一本抜いてくれ。」この男もそうしました。そして領主は，その二本の髪の毛を片手に持って，「あの男がわしの白髪を抜いた時，黒い髪の毛を抜いた時と全く同じ位わしは痛かった。これと同じ様に，わしは市民の悩みによる痛みと同じ位の大変な痛みを，市民の不仲により受けるのだ。だからもしおまえたちの生活が大事なら，お前たちはお互いに仲良くしなさい」と言いました。そこで二人は領主の前で互いに握手を交わし，赦し合わざるを得ませんでした。

これが本当の領主でした。現在では市民が，互いに仲違いさせられています。

第四百二話　冗談
チューリヒで二人が和解したこと

私が噂で聞いたところでは，チューリヒの二人の市民が互いに訴訟し合って，出費を重ね，二人とも破産しかかっていたとのことでした。ある

時，その一人が自分の息子に向かって言いました。「お前の甲冑を身に着けろ。わしも甲冑を着ける。それからお前の斧槍を肩にかけろ。わしもそうする。」そして二人揃って出掛け，もう一人の男，即ち敵の家の戸口で扉を叩きました。この二人の敵方は窓から外を見やって，自分の敵がその息子と共にやって来たことが分かりました。そして家来に，「さあ，わしらも甲冑を着けよう」と言って，それぞれ斧槍をひっさげて階下へ降り，四人は相対峙して立ちました。そこでその家の主人であった男が，「そのような姿でわしのところへ来るなんて，どういうことか」と聞きました。すると相手はこう言ったのです。「わしは全く友好的な気持ちでやって来たのだ。わしたちは互いに訴訟し合って争っている。それで二人とももう少しの処で破産しかねない。若しそんなことになったら，世間の物笑いになる。そして全スイス連邦中で，わしたちのこの事件について，良く言う者は誰もいない。わしたちは，あの争いを裁判で和解にするため，遠くからでもその音が聞こえる鐘を鋳造しよう[1]。君には娘があり，他方わしには息子がある。この二人を結婚させよう。そしてわしを許されよ。そうすればわしは君を許そう。そしてわしたちは仲のよい友となろう。」これに答え敵方の男は，「確かに君の言う通りだ。わしは嬉しいよ」と言いました。そして娘を呼び，その件を示して，娘に気に入ったかと尋ねましたが，娘は，「はい気に入りました」と色よい返事をしました。こうして約束の握手が交わされ，両家では料理が始まり，婚礼の服の着付けがなされ，皆が食ったり，飲んだり踊ったりして，他家の男たちも招かれて，お互いに上機嫌でした。誰もがこの変化に驚き，彼等は互いに英知の中で暮らしました。これらの者たちは真っ当な人々でした。

1　世間にはっきり分かるように決着をつけようという意味。